

定めたことである。

侍六騎は源義頼が豊國に下向し左時に随従し左が、戦に馴れず困苦に耐えずして脱落したものが、或は壺の浦で四散した平氏の落武者が、定かでないが凡そその時代の人と思われる。墓石に約七百年前のものと思われる。型の土ムがある。

### 水立の今昔 — 地形から見た —

水立の地名に、波越峠、岸の上、岡山、沖岡、波切、津久良田等があるが、皆水に關係したものである。

水立の低地は昔は又を海だつたと思われる。岩石に海岸の荒波に浸蝕された跡が見られるし、本矢劉吉が妙見社に奉納した鼻線岩はその代表的なものである。七百年の昔侍六騎が御屋本に流れ着いたのもおし得たことである。水立川の五反田まで舟が通行したとは、田西甚平翁の語るところであり、明治の末頃までは土井橋まで舟が来て、佐伯町に往復していた。

### 水立の名字

以下は兒玉佐四郎翁の語つたことである。

世は御一新となり、庶民に名字即ち姓を賜あるようになった。新名利八は新しく名を戴いたから新名とつけた。小川嘉六は家々近くに小々な川があつたので小川とつけた。他の家は昔からある古い家だから古い文字の名をつけた。本矢、本田、木本、久保などである。うちには佐四郎翁のこと、小女玉があつたから兒玉とつけた。ところか近所の人「それはよい名字」と言つて兒玉とつけた。それで原部落には兒玉姓が多い。明治維新の際、庶民に姓氏をつけさせ左事情が決られて面白い。

### 妙見社

或る年疫病が流行した。六部さんから聖地を遂定してもちつて妙見社をお祀りした。エ事が完了し、祭事はすんだので部落民が六部さんを見送つた。ところが松浦峠の中敷で六部さんを見失つた。六部さんは脚が速いので部落民はついて行けなかつたのである。村人一同は「六部さんは神様であつたであらう」と語り合つたといふことである。

### 天神社

落雷が多くて農作物を荒らして困るまで、天神様をお祀りした。それからは落雷が少くなつた。

これは天神社の起源についての伝説である。

(終)

覚書

### 相江港 (其の三)

山田善市

(住所 佐伯市下堅田相江)

私の祖父善右工門は、相江港最後の船主として、第一、第二福寿丸、三艘の船で京阪との交易をやつていたが、明治二十六年頃止めてしまつた。私の生まれる前に故人となつてい左で昔の様子を聞くことが出来なかつたのばかりだが、祖母が元気で八十八才まで長命し左ので、色々と昔語りをきくことが出来た。

その祖母の話によると、相江港の正月行事に「衆初め」と「当元(村祈禱)」と「龍王権現の祭」と三つが盛大な

行事が行われていた。

一 正月の庚辰初め、ホウランエンヤ

港には千石船や大小船の船がもやっていた。今日元旦とあつて縁起を祝う船のことして、しめ飾りも出来、各船には色とりどりのフラホが揚げられ、朝風には左めいてゐる。

睦田川の朝もやが消える頃になると、祝の御神酒に顔をはてらせ舟子たちが、親船から宝来船に乗り込む。

新調の印ハンテンに鉢巻姿の若衆は、船頭ならではのいきな姿である。満船飾の宝来船は川上へとかけ声勇ましく漕ぎ上つて来る。

「ホウランエンヤ ヨイヤサノサツサ

ヨイ ヨイ ヨイトセ

大太鼓の音が新春の鎮守の森にこだまする。それに合せて櫂をこぐ。ギツギツトかきこえる。小波をたてて宝来船は勢よく川をすべつて行く。船先に立つた櫂振りには、両手に持つた御幣を前へくくる回して左右に振る。いかに立つたかい使いは水車のように頭上へくくるくく回して踊る。ホウランエンヤの掛声はいよ／＼調子高くなる。

こういふ船が後から後からこ漕ぎ上つて来るのであるから、港はまさにホートレースである。兩岸には若男が拍手をあげて迎えるというにぎやかなのである。

漕ぎ上つて来た舟子たちは神社を拜と終えて、船主の家でお祝いの酒宴に花が咲き、歌えや踊れの大騒ぎとなる。

年は一度の行事だけに派手にやつたものだが、今日見る由もない。思ひ出すのは大正天皇御火災の時、奉祝にホウランエンヤの行事を再現したことである。車の上には

船をつくり、満船飾で飾り立て、鉦太鼓ではやし立て櫂をこぎ、ホウランエンヤで踊りながら佳節の町内を引き、回したら、大変な人気であつたことを記憶している。

ホウランエンヤは港町に行われていた海上安全の祈願で、又「宝来栄光」から来た、宝がやつて来て栄える意味ともいう。

二、当元（村祈禱）

柏江港は小字を四つに分けてゐる。野中組、腰之内組、上組、下組である。村祈禱のお祭りはこの四組に分けて組内で正月八日に行われている。

当元の家は勢揃いすると、足田の神官が祭壇に祝詞をあげて罪穢を祓い、家内安全と繁栄を祈念する。

それが終ると組内のきまり事を相談する。後日、おめで、新年宴会を兼ねる。考えてみるとうまいことを始めたいものである。つみかけがれを被つて新年の事を祈願し、村内の政治始末をして、後は親睦をはかるといつた具合である。昔は宴会の用意に、前日港におみせを入れて魚をとり、それを肴にして、さし又魚は店から買った。このおみ打が又におきわつたことである。

こんな工合で準備から当日まで、村中はお祭り気分だつたらしい。現在は昔ほどにぎやかでないが、当元は順番に回つて来て、何百年の伝統を守つてゐる。先日このお祭りの記録が見つかつて調査してみた。古いものは文化十二年の控があり、それには下組三十人の名が御座座と筆頭に家順に書いてある。中にはお為さん方の山伏永昌院の名もある。終りにメ三十人、五重ありとある。一戸五重刺の集金をして費用に当てたことになる。

次に買物控がある。  
壱分五厘 御初穂、  
五厘 若子代、  
四分五厘 醬

油代、 鹿分 油代、 鹿分五隻 寸代、 土隻  
とうふ代、 鹿分 着代、 五隻 紙代、 四分五  
隻 酒代、

年によつては白魚代、かき代等もある。これらによつて、組内の婦人が集つて腕によりきかけて御ちやうさを作つたのである。

### 三、龍王権現春祭り

戊戌の正月二十八日は

村の鎮守の龍王さまの

年に一度の初御縁日

我もおれもと参詣すれば

と音頭にあるように、近郷近在の善男善女が今日を情と着飾つた参詣人で、龍王山はごつた返したという。

標高三百余米の龍王山上には八丈龍王とお祀りして、海上安全の神として信仰され、靈験あらたかであつた。それ故にこそ遠回の道も遠しとせず参詣人がたえずあつた。祭の当日は一、馬居のあつた馬ふせというところには「にうり屋」が店開きして客を呼び、諸國の猿鳥まで集つて、あちらこちらの本陰で田座をつくりはくちを打つといふ有様、にわか市がたつみである。今では頂上石のほころが二つ残り、ローソクやさいせんの上つているところを見ると、時おり参詣人があるのである。正月二十八日には村から御神酒をあげ、菓ふやおにぎりの接待とすることは年中行事の一つになつて、今もつづけられてゐるが昔の面影はない。

龍王山の頂上からの眺めはすばらしい。東に木立、大江難が見渡され、北に堅田平野、中山峠を見越して西谷鶴岡、市街地、港へと見はるかし、大入島、佐伯湾へと

視野が開け、南面すれば山又山の山岳美、西にははるかに大野郡の山又山が重なり合つて、かすんで消えるといつた景観である。

ここに一本の大松があつた。お為半蔵相見初の本松と名づけていたが、悪童のたぐひに焼かれて今はない。然し登り三十分、下り二十分というやさしい山で、ハイキングコースとして最適地といえよう。

(終)

### 「三回峠の戦跡」の記事について

(大分市津田内野宮三氏より御厚意寄書)

前巻 先日知人より佐伯史談館蔵書西土子書を見貰つて興味深く読みました。東葉芳之の書かれた三回峠の戦跡の文中、一五頁下段二行に、「伊東直記」と伊東直二は同一人物かと疑問視されてはいますが、人物が違ひますので御参考までにお知らせいたします。

記

伊東祐隆(直二) 鹿児島市後進出身士族

河辺衛大尉 西南の役まで谷山区長

西南の役 薩軍四番大隊九番小隊長で従軍

熊本城攻撃等に参加 各地に戦蹟

明治十年六月一日 臼井城攻撃に参加

九月二十四日 重傷したため城山で降伏

十月十五日 裁判により士族を降伏

懲役五年の判決を受く 年令三十六年十月

伊東直記

宮崎県飯肥士族 旧飯肥藩大参事

明治十年三月十六日 飯肥隊を編成 熊本城攻撃等に参加敗走

七月二十七日 飯肥を指揮中 官軍に降伏

十月三十日 裁判により士族を降伏

懲役七年の判決を受く 年令四十一年四月

高橋清之助(以上)